三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと再生ネットワーク
〒100-1101
東京都三宅島三宅村神着320-2
TEL 090-4922-0798
FAX 03-3964-4065
発行人：会長 佐藤就之

会長時評

生活再建 道半ば

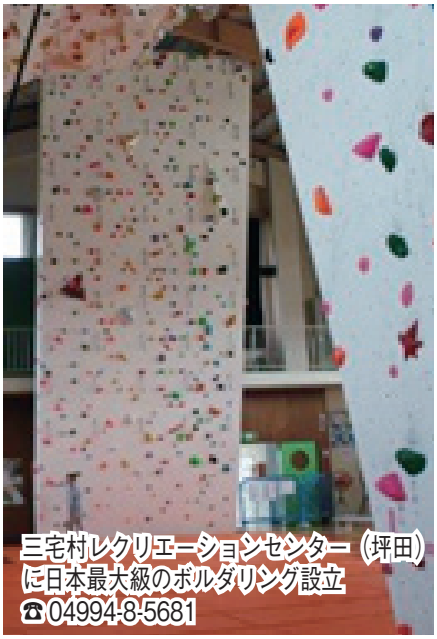
五輪目指す歩みもあるが…

日本各地で自然災害が発生する中、長期災害からの復興に向き合う三宅島ではボルダリングジムが開設されるなど東京五輪を見据えた活動が行われている。一方で、島民の生活再建は未だ道半ばである。

台風が日本列島で大暴れし大きな被害をもたらした。各地の被災地、さらに北海道などで被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

三宅島でも何度も警報が出た。高齢者など早めに避難所（各地区にあるが状況により開設する）に避難した。

今回も想定外の被害が各地で多発したが、村職員も大変ですが避難を必要としている高齢者等の声を聴きながら安全確保の努力をお願いしたい。



三宅村レクリエーションセンター（坪田）に日本最大級のボルダリング設立
☎04994-8-5681

ボルダリングジム開設

三宅島も帰島10年を経て、様々な整備、再生が進展。廃校された坪田体育館に、日本最大級のボルタリングジム（写真）が3月に完成した。高い体育館の屋根までとどく巨大オウールは、目をみはる。２０２０年東京オリンピックのスポーツクライミング開催会場として立候補をしている。

また、「ジテンシャ（自転車）ジオトレッキング（山歩き）」も整備、５ルートで火山地形の35kmの島一周を汗と根性で回る経験は、一生の思い出に。

三宅支庁は、冨賀浜園地（阿古）を完成。三本岳と夕日を見たら別天地だ。日本最北のテーブルサンゴと熱帯魚の群れは、ダイビング、磯釣りのポイント。トイレ、シャワー、休憩コーナーもある。島民も仲間を誘いピクニックで「島に帰って良かった」とあらためて実感したい…。三宅支庁の独自事業努力に感謝。

・11月予定。12、13日エンデューロレース
・19日（土）産業祭
・23日（水・祝）福祉祭り。

高齢者世帯は54・7％

前号の「管内概要・第5社会保障」を訂正したが生活保護概況は、避難時被生活保護世帯は、17世帯、20名であり、全都を下回る。全島避難により生活手段を失い平成15年11月は、最高時１０２世帯、１４２名となった。帰島時２分の１が帰島できず、帰島者も一時金の収入認定等の理由により廃止で減少したが27年は、高齢者世帯の割合が54・7％、傷病、障害等まだ増加傾向だ。長期災害の傷跡に目を逸さず、生活再建はいまだ途上にあるのだ。

【訂正】本紙第62号・7月1日発行の2面を訂正してお詫びします。

（誤）３人に１人が生活保護　平成27年の生活保護人口98人、75世帯、住民人口で割った保護率は、何と33・5％に達する。３人に１人が生活保護者となっている現状は、かなり深刻だ。

（正）「増加する生活保護、生活保護法の適用者は、平成27年4月1日現在で75世帯93人である。保護率は33・5‰であり、全都の保護率は、21・9‰。」と訂正。（注）‰パーミルは人口１０００人当たり。

事務局便り

○第46回世話人会
11月26日（土）
18:30～20:30
巣鴨ルノアールにて、総会準備の世話人会を行います。

○三宅島支援者の集い
12月10日（土）
18:30～20:30
第一部・三宅島ネット総会、第二部・支援者の集いを行います。皆様お誘い合わせのうえ、ご参加ください。

○ご寄付のお願い
郵便振替口座
口座番号：00120-3-545036
口座名称：三宅島ふるさと再生ネットワーク

【三宅島ふるさとネット事務局】
郵便番号：173-0005
住所：板橋区仲宿2－1
携帯：090-4922-0798
FAX：03-3964-4065
連絡先　佐藤就之

浅沼徳広元村議に聞く

「村民のため誠意を尽くして」

三宅村の村議会議員を16年間務め、特に全島避難から避難解除後にかけ、島の漁業の再建や人工透析機の導入などに尽力した浅沼徳広さん。浅沼さんに島民のため誠意を尽くして活動をしてきた16年間を振り返っていただいた。

プロフィール

・昭和34年東海短大卒
・36年（株）岡田商船入社（通信士として）大型タンカー・貨物船で世界中の主な港に寄港、見聞を広げる。
・平成4年（株）オリオンシッピング退職（旧岡田商船）
・6年三宅村民生委員就任
・8年三宅島漁協理事就任
・12年民生委員退任
・12年三宅村議会議員当選　9月全島避難
・13年三宅島漁協専務就任、再建に取り組む
・20年三宅島漁協専務退任
・28年三宅村議会議員退任

現在　不幸な人や猫をなくし、三宅島の貴重な生物（アカコッコその他の野鳥、オカダトカゲなど）を守り、共生のため「にゃんこの会」を仲間と共に立ち上げ活動中。寄付等を募り、猫の避妊・去勢など行っている。また海に潜り、三宅独特の石を叩き魚を呼び寄せ釣る魚法は、現村長と私が継承しているので、テレビ等で度々放映されている。

私の議員生活16年間に何をやってきたのか、かたちあるものをざっと拾ってみた。

シドニー港に寄港した浅沼さんの乗る自動車運搬船

1、三宅支庁で事業説明会が毎年5月に開催されるが、避難直後から同説明会や三宅村議会で伊ヶ谷港の早期完成を訴え続けてきた。理由は島の既存の二つの港は、ナライ（北東の風）の波のうねりに弱く、伊ヶ谷港が出来ればナライ風でも寄港できるからだ。

帰島後の事業説明会でも訴えた為、当時の村長から全議員、村の全管理職臨席の場でも非難されたが、当時のK都議が私と全く同意見だったと聞く。現在、同港は島にはなくてはならない港になっている。

2、三宅島漁業協同組合（以下、漁協）の負債約2億8千万円の返済にひと役。

平成12年の全島避難後、同13年3月に当時の漁協専務が、この負債の始末をどうしたらよいかわからないと言っていたが、突然退転し私が要請を受けて専務に就任した。（漁協の運営は組合員の水産物の水揚げの1割を運営費に当てている為、収入が激減し、とても給料が払える状態ではないので議員活動の一貫として無報酬でやることにした）

東京都、都漁連、三宅村で知恵をしぼり返済することになったが、三宅村議会が承認するかどうか不明なので、その為村長より議会対策を、要請された。

都庁32階の臨時村長室に漁協の全理事を集め、村長から「この件については、私も相当考えたが将来の漁協のことを思って返済することにしたが、浅沼徳広さんの尽力があったからこそ出来た。皆さんは徳広さんに感謝しなくてはいけないよ」と言ってくれた。

3、本来漁船が被災した場合、その漁船にかけてある保険料でスクラップ、又は修繕するのが当たり前である。

しかし、それでは4年半に及ぶ避難生活で経済的に疲弊しきっている漁

民が、帰島してから漁業を再開することは厳しいので、都と村でスクラップ代金、または修繕料を負担してもらえる様、都にお願いし、実現した。予算額は、約１千７００万円だった。

４、避難中陸揚げしていた定置網が台風で流されて使用不能になった。

当時の行政担当者は定置網再開に否定的であったが村長、理事会が再開に賛同してくれたので、都議のもとへ足繁く通い予算をつけてもらった。（予算額１億３千万円）

５、当時定置網は、漁協経営の赤字の代名詞の様に言われていた。

漁協経営の専門家と言われているＹ氏が来島して「経営を健全化するのには定置網を止めるべきだ」と言っていたが、私は素人ながら、そうではないと固く信じていた。

何とか定員を減らし人件費を抑えれば黒字経営が出来ると思い網を改良した結果、４人で網おこしができる様になり、しかも今まで使っていた１台１２０万円の油圧モーター６台が不要になって、危険性も激減した。その結果、再開後１年目で約２千万円の黒字に、次の年は約１千万円の黒字となった。

６、避難当時、漁協には正規職員13名、臨時職員６名いたが、帰島後は正規職員５名、臨時職員１名にした。

職員を１名増やすと年間２５０万円から３００万円がかかる。例えば３００万円かかるとすれば、主な収入源である水揚げを３千万円増やす必要があるからである。（当時の年間水揚げ金額１億５千万円前後）

７、中央診療所の入院患者の食事が、希望すれば特養老人ホームあじさいの里から実費で運ばれる様になった。

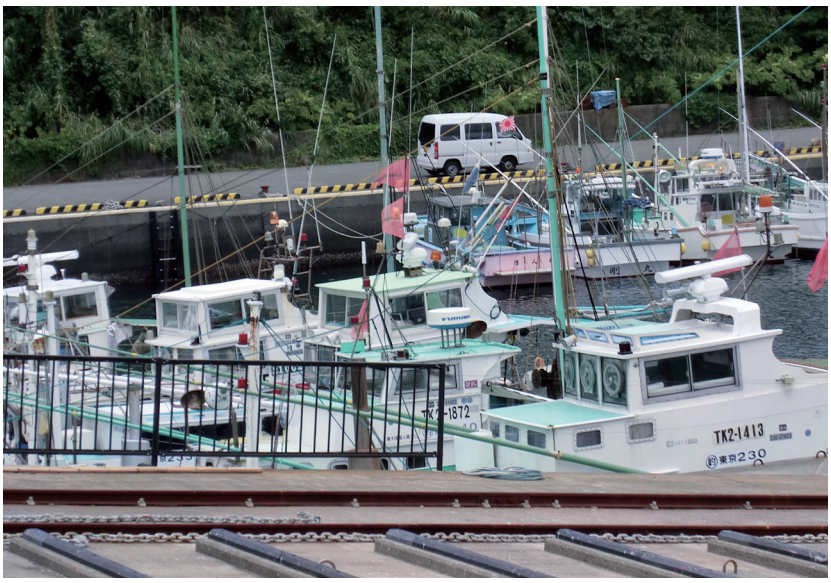
私の母が入院していた時、不便な体験をしたので中央診、あじさいの里に行き話をして、平成20年第一回村議会定例議会で質問・要望をして、実現の運びとなった。

８、私は、人工透析の導入を議員に当選した直後から主張してきた。途中４年半に及ぶ避難生活があったが、その実現に実に約14年の歳月が過ぎた。行政が中々動かないので署名運動を起こしたらわずか10日あまりで１千１５３名の方々が署名をしてくれた。

長年実現できなかったが、現櫻田村長が就任して、すぐに実現した。これにより人工透析を受けなければならなくなっても安心して島に住むことが出来る様になった。在京者も事前に申し込めば利用できる。

９、村道の改修で大きなもの１件、その他若干。村民の行政に対する要望、苦情など速やかに取次、改善をはかった。

以上、主なものを書きしるしたが、まだまだ書きたらない。機会があれば後に譲る。例えば、漁協の専務理事を約７年半務めましたが、その間報酬類は一切受け取っていません。１議員の立場から村民のために、誠意を尽くし仕事をしてきたからである。



漁船でにぎわう阿古漁港

おさかなセンターと漁協事務所

三宅島で水揚げされた鯛

若い世代が新たな事業を
島の未来を背負って

伊藤　奨さん
若者繋げる取り組みを

4月から三宅島に移住してきた伊藤奨です。幼少時から大島、父島、八丈島と島流し人生の流人です。現在は一般社団法人アットアイランドを立上げ「東京諸島がずっと続く地域であるために」を理念に仕事創りに挑戦しています。今回、このような場をいただき感謝いたします。

〈東京諸島の若者を繋げたドリームプロジェクト〉

「伊豆諸島の高校生を繋げ将来を考えたい！」という想いが連なり、ドリームプロジェクトは2008年夏に88名もの伊豆諸島の高校生を巻き込み、島を貫いた繋がりを育みました。時を経て高校を卒業し都内に出てからも島の壁を越えて集まり、共に支え合い楽しみを共有するような関係性を築いてきました。

〈東京諸島で仕事創り〉

大切な東京諸島の繋がりをカタチにして、今後も繋げていきたいと考え有志で@アイランドを結成。会議や島への訪問を重ねた結果、島の地域に根付き、魅力や課題を当事者として感じ、ヒト・モノ・カネを繋ぎ合わせて価値を生み出す存在になりたいと気が付き、島で仕事を創ることを決意いたしました。

〈覚悟を持って三宅島へ〉

三宅島を拠点に決めました。理由は、海洋教育の下地、規模、地球の循環を感じる自然、火山との共生などの総合的なものです。

しかし、決め手は噴火の経験をした三宅島の仲間たちが、島を想う気持ちがとても強いことです。「この仲間たちと島で共に仕事をしたい」という感覚を信じて三宅島へきました。「何ができるのか」未だ試行錯誤の毎日ですが、覚悟を持って取り組んでいきますので応援していただけましたら幸いです。

穴原航太郎さん
好きな島で新たな挑戦

4月に帰島して参りました一般社団法人アットアイランドの穴原航太郎と申します。私は2000年（当時小学校4年生）に噴火・避難生活を経験したことから愛島心が芽生え将来は島で生きるとの思いを形にすべく島で挑戦する気持ちで帰ってきました。

〈主な事業内容〉

弊団体は、交流人口促進・外貨収入の視点に立った観光事業と、将来の島を担う子どもたちへ自然体験を提供する教育事業を柱とした事業を展開していこうと考えております。

これまで、観光客に対して「島暮らし×学び」をテーマに観光価値としてプログラム提供を行っているほか、島内外の小・中学生に対して三宅島の自然を活かした学びを重視するキャンププログラムを行って参りました。

三宅島における「学び」の視点は観光にも教育にも有益な資源であることを改めて感じています。

〈東京諸島に馳せるビジョン〉

こうした島の資源を東京諸島とも共有・連携を強めることにより、今後の東京諸島の社会的課題に挑戦できる組織にもなっていきたいと考えております。

経験の浅い若輩者ではございますがどうぞよろしくお願い致します。

編集後記

今年は、自然災害が多く、今後新たな災害が起こらないように願うばかりです。三宅島の皆様も、どうかお気を付けください。

4月から三宅島で新生活をされている伊藤様、穴原様の今後のご活動を、私たちも応援いたします。

（DTPA一同）

ご寄付者名

（6月12日から9月17日まで）

光安千久子様、室崎益輝先生、吉野文雄様、栗原未帆様、土岐冨士子様、福士敬子様、坂本健様、吉田信行様

皆さまのご協力に心より感謝を申し上げます。

この新聞は、神奈川県の私立向上高校新聞委員会の卒業生がつくる「DTPA」が編集作業を担当しています。